

近代におけるチベット仏教の直面する問題

—チベット仏教と近代—

高松 宏 寶

(クンチヨック・シタル)

- 一 序論
- 二 チベット仏教近代化の歴史
- 三 チベット仏教の教理的な特徴
- 四 僧院と宗団に関する問題
- 五 近代的な仏教学とその研究機関について
- 六 まとめとして

一、序論

いかなる伝統でも宗教でも、近代の流れにおいては、さまざまな問題に直面するのは当然のことと思われる。一般の仏教にしてもアジア全体を考えると、ヨーロッパに由来する近代化の中で大きな影響を受けてきた。こ

した流れの中で、仏教には、失うものばかりでなく、文明化したことにより得たものもあると思う。

私の理解する近代とは、十八世紀から始まったヨーロッパの科学と技術に基づいた客観的な世界観を重視する時代である。その特徴は、科学的、文明的、合理的、合理主義的であり、すべてが根拠と理由に基づいた思考にあるということだ。理由にもとづく人間自身の論理 (to rely on their own reason) に頼り、論理的な明確さをもって表現し難いものを嫌い、客観性を最も重視した目で自然というものを分析しとらえてきた。チベット仏教の学者であるロバート・サーマンによると、「タブーにチャレンジして、世俗化させようとしたのだ。そして彼らは、自然科学から膨大な情報を得、伝統的な社会に出会うと、自らの発展や進歩に邪魔なものは捨て、ヨーロッパは世界を支配していった。革命で変化を強い、彼らの文明からそれらを捨て去る⁽¹⁾」のである。

これらはもちろん外面についての話であり、近代科学が内的に標榜するところは、「この地球を天国にする」ということだ。ヨーロッパは、共産主義、資本主義、個人主義からは満足が得られなかった。そこで、科学と技術によって地球を夢のような理想の楽園にしたいと邁進したのである。すべての病気や、苦しみ、貧困、悩みからの解放。科学の努力が向かおうとしているのはそこである。その背景には、ヨーロッパではキリスト教に基づいて、「神様が創ったのに、世界はなぜ完璧ではないのか」という疑問が生じたということがある。キリスト教の答えは、「出来る範囲の良い状態」(It's the best of all possible worlds) というものだったが、西欧世界は疲れきってしまい、科学とその技術に頼ることになったのだ。

一方、私たち仏教徒の楽園は、浄土や悟りの世界である。この現象世界は一時的なもので、我々は悟りの世界を希望している。科学は、前述したように、この地球そのものに天国を築くことを求めたのであり、ここで仏教と科学はぶつかり、タブーなどに挑戦し破壊していき、そこから自ずと新しい世界観が生じてくる。そこにそぐ

わないものは消し去られ、生き残らないのである。

今述べたところには仏教の一番の課題がある。仏教と仏教文化は今後も生き残るだろうか。日本仏教は明治時代以降、この近代化の波にさらされ続けてきた。したがって、現在、現実に生き残っている日本仏教とそのシステムというものは、まさに十八世紀から十九世紀にかけての近代化に淘汰されてしまうことなく存在し続けてきた姿なのだ。とはいえ、これから先ももちろん、どのように生き残る道を模索するかという課題は残るだろう。

こうして仏教は、近代科学や西洋文明と出会いながらも存続してきたわけだが、それは、西洋文明の視点から、「仏教は、思想的なシステムであり、哲学的な思考であると同時に、豊かな瞑想方法を持っており、また苦しみや悲しみを解放しようとする宗教である⁽²⁾」という認識が導き出されたということもある。またアジアでは、十九世紀からさまざまな政治や社会の変化を経て、学術的な調査も進んだ結果、もとの仏教に戻ろうというスロークンが生まれ、仏教は苦しみと再生からの解放のための教えであるという共通認識が生まれている。

以上述べた観点から、チベット仏教に注目してみると、近代化に出会うのは遅く二十世紀中頃のことである。まだまだ近代化の体験がほとんどないという状態であった。それは、チベットが国策により、十七世紀から二十世紀中頃まで軍事主義を避けて、出家主義のもとで鎖国の状態を選んだからである。その背景としては、チベットでは、七世紀から十三世紀頃にかけてインドから受け継いだ仏教を、自国の大事な文化および宗教として考え、それこそ自分の国や民族の生き方として考えた上で、それを守るために特に西洋文明と衝突するのを避けてきたのである。しかし二十世紀においては、アジアなどからの政治事情の影響で、鎖国を守ることができず、突然、近代社会の中に放り込まれることとなった。そのために、社会、文化、政治的にも、いろいろな問題に直面し、チベット仏教の伝統にも変化が及ぶことになったのである。さらに現在は、グローバリズムの影響で、今までは

チベット民族のためのチベット仏教であったものが、もはやただチベット人のためだけのものでよいとは言えなくなってきた。

こうした意味で、今まで述べた問題と、これから近代社会でチベット仏教の伝統を維持して守っていくために、チベット仏教がさまざまな問題に直面するのは、当然のことと思われる。従って、「チベット仏教の近代化」の問題を論じていくことは、意義があると考ええる。

二、チベット仏教近代化の歴史

序論で述べたように、チベット仏教においては、日本とは異なり、近代化の歴史がほとんどない。唐突に国の政治状況が変わり、動きが取れずに戸惑った時代があった。一九五〇年代までは、完全に自分たちだけの世界を築き、近代化と西洋文明を拒否してきた。そういった環境で、仏教と仏教文化を堅固に育ててきたのである。チベットは、仏教に自国の運営以上の価値を見出してきた。物質主義の近代化には魅力を感じなかったのだ。なぜなら、仏教の認識によると、「仏教では真理はすでに解明できている」からである。すなわち、釈尊の悟りである。仏教の行と実践とはそれを追体験していくことであり、近代科学のように常に進化と変化を遂げ、新しい真実を追求していこうという願望を持ち合わせてはいなかった。⁽³⁾

近代の流れの中で、一九五九年以降、突然にチベット仏教の僧侶たちに、新たな社会が開け、インド、ネパール、西欧社会に出て行く状況になった。その時彼らが戸惑ったことは、今まで自分たちが重視してきた仏教の思想や考え方は、外の世界でどこまで受け入れられるのだろうかということであった。どれ程通じるのか、一体どこまで真実であるのか。そういう思いを彼らは体験した。

しかし現在は、一九五〇年代から六〇年代にかけて世界が仏教を受け入れた状態とは随分様子が異なってきたようにある。チベット仏教は日本と同じ大乘仏教であり、哲学的な唯識・中観思想や、密教的な瞑想方法を持つていることで、科学が進歩し続けている現在でも、非常に示唆に富む内容として受け入れられているのではないだろうか。チベット仏教の僧侶自身も、自分たちの思想や考え方は必ずしも近代化と科学に従う必要はない、と認識し始めており、近代の科学的な考え方や信仰は、人類のため並列的に残していくことも非常に意義深いのだと主張している。したがって、チベット仏教の伝統的な主要な特徴、例えば転生活仏や輪廻転生、カルマ理論などを世界に向けて理論的に説明していくことは、重要なことなのである。

実際、現在多くの人々が、近代化した教育や技術に夢中になることに辟易してきている様子を、あちこちで目にすることができる。科学を追究した先には樂園が待っている筈だったのに、現状はそれとはあまりにかけ離れていることに絶望感を抱き初めているのだ。そして、新しい思想や考え方を求め、チベット仏教的な考え方の中に、この現在の閉塞感への打開策が見いだせるのではないかという期待から出た好奇心を持つ人々も増えつつある。こうした意味では、科学的か非科学的かという問題を超えて、我々の社会は、さまざまな考え方や豊かな生き方を求めていると言えよう。例えば大乘仏教には、生きる土台となる内的、心理的な分野についても、我々にも馴染み深い『瑜伽師地論』などに説かれる心の分析、瞑想法、あるいは密教の宇宙観、五大の理論、法身世界の思想など、人間の直面する問題への豊富な提言や解決策が満ちあふれている。しかもそれらは、非常に論理的に説明でき、しかも科学的でさえある。

三、チベット仏教の教理的な特徴

近現代の科学とチベット仏教について考える際、チベット仏教の教えの特徴は何か、ということをまず知る必要がある。つまり、伝統についてである。

チベット仏教は、基本的に密教を含めた大乘仏教であり、八世紀から十世紀のナーランダー大学で勉強され伝えられた思想と実践方法に基づいた教えである。チベットでは、十三世紀から十四世紀の信仰、伝統、考え方が今も続いているのである。そのような中で、ツォンカバ大師の『菩提道次第論』は、現在も説法や菩薩行の理解のために活用されており、そのまま信仰に基づいた実践的な内容をもっている。そこには、修行に入るための根本的な四つの論理が説かれている。第一は、得難い人間として生まれた有暇具足という理論。第二は、無常と死の恐怖。第三は、生まれ変わりに基づいた輪廻転生。第四は、カルマ(業)の因果関係の法則の理解である。⁽⁴⁾この四つのテーマに基づいて、行と実践の目的もそこから理論づけられている。チベット仏教にはおよそ四つの宗派があるが、いずれの宗派も同じで、インド仏教に基づいた常用テキストがそれぞれにある。

いま述べた四つの論理を具体的に見ていくと、有暇具足という観点においては、現在私たちが人間に生まれたことも偶然ではなく、過去のさまざまな行為と意思によって生じた得難い機会であると考えられる。それは、物理的な存在だけではないという思考に基づいているのである。言い換えると、現在は未来にも繋がっていくこととだ。それはつまり、特にチベット仏教は、生死輪廻を現世の人間社会にとどまらず一切衆生という観点から考えているということなのである。言い換えれば、魂や意識は永遠に生まれ変わってくるという考え方と比べてよいだろう。

カルマ理論も、人間存在は、単なる物理的な因果関係の法則だけではなく、心という意識の連続体に基づいて永遠に続いていくという考え方によつてゐる。過去の行為に基づいて今生もあるし、今生の行為に基づいて未来もある。このような考え方で、輪廻転生とカルマ理論を一体化させ、理論化してゐるのである。俱舍論に説かれてゐる三世兩重の因果も、文字通りに信じて説明してゐる。チベット仏教では、今もラマたちは、このような理論に基づいて語り続けている。生死輪廻や因果関係の法則は、当然、近代の世界観と科学的な思考によれば、簡単に証明できない非科学的な考え方と言われてしまふのは当然のことと言えよう。しかしながら、これは、もとは生まれ変わりという理論から成り立つてくることであり、意識と物質の根本性質は別々であつて、意識のものと意識以外にはなく、物質から意識を生み出す事はあり得ないといふ、ダルマキールティを含めたインドの仏教論者の理論に基づいてゐる。したがつて、チベット仏教の側から見ると、心や意識について、科学的にどう位置づけるかということが問題になつてくる。科学的には、心の働きや感情のものは脳に位置づけられるとすることが多いが、これは、チベット仏教の認識においては満足できる説明ではない。

こうした輪廻転生などチベット仏教的な考え方を、これからもチベット仏教は自信をもつて説き続けるのか、それとも近代の考え方に合わせてトーンダウンさせていくのか、といふ問題に直面する日が来るだろう。しかしチベット仏教は、その矛盾は承知してゐるものの、将来の最先端の科学が、いつの日か心の本質をより一層突っ込んで解明する時が来るのではないかといふ望みを持つてゐる。チベット仏教の最高指導者であるダライ・ラマ十四世もこのことをよく認識し、「眞実を実行と体験によつて追求し続けていくことが、双方の主張である。間違えた主張や約束があるなら、捨てる気持ちも双方にあるはずである」と、度々コメントなさつてゐる。

俱舍論の宇宙観などは、目下、科学は否定しており、仏教もあきらめかけてゐる。ダライ・ラマ十四世もおつ

しゃっているが、釈尊がこの世にあらわれたのは、物理的に宇宙がどのぐらいの大きさか、月との距離がどのぐらいか、ということを測るためではなく、ダルマという真理を追求するためである。命あるものにも物質にも両方に関わってくることで、特に苦楽の体験を解放するためであり、そのためには真理を知る必要がある。俱舍論を否定しても、釈尊の真理を否定する必要はないということは、チベットの学者も受け入れている。

同時に、前にも述べた通りに、近代といえれば人間中心であり、具体的に手が届く範囲の目的を設定して、個人や社会が動いていく。一方、仏教の目的は非常に高い。はるか遠い目標である成仏という観点から見ると、一般的な目的や、今生で手の届く目的などはその範疇に入っていない。そういう意味では、奥深い仏教の目指していることと、近代社会が希望していることには相当のずれがあり、その点が仏教徒たちの困惑するところでもある。

ダライ・ラマ十四世も、近代の思想と科学の考え方には非常に前向きであり、現在も科学と仏教の対話に積極的に参加なさっている。しかし、単なる物理的な因果関係の法則だけで仏教の縁起を説明してしまうと、人間は生理学的な機械になってしまう。そうなると大乘仏教の慈悲の精神とか、輪廻転生の理論を説明できなくなり、菩薩の誓願と菩薩の救済も語ることができなくなる。かと言って、両者は対立すべきものでは決してなく、問題の多い近代社会を支えるために、相互に補い合う関係にあるべきであろう。仏教をより論理的客観的に説明するために科学の知識を借り、科学には今だ解明できないが、人間がよりよく生きていくために役立つ部分を仏教に目を向けることで、解決していけばよいのではないだろうか。

四、僧院と宗団に関する問題

チベット仏教の特徴はもともと僧院中心の組織であるから、僧侶たちの生活も、仏教の勉強も、実践の場も、

僧院にある。すべての仏教学の研究が僧院でおこなわれているのである。

これは歴史的に言えば、十一世紀にアティーシャの来訪によりもたらされた理論と学修方法と、十五世紀にツォンカパ大師が大乗仏教の顕教と密教を総合的にシステム化し、学問と実践を行う場所として、ガンデン寺を含めた三大寺を中央チベットに建立なさった影響が大きい。その後十七世紀に、ダライ・ラマ五世が宗教と政治を総合化して国家を形成した。軍事的な要素をすべて捨て、僧院中心の社会をつくり、近代においても仏教の実践と研究は僧院任せであった。⁽⁸⁾ チベットでは、人口的には約一割、男性ではおよそ三割が出家者である。寺院の数は多くはないかもしれないが、ひとつの寺院の僧侶の人口は、非常に多い。二十世紀の中頃、デブン寺には七千人以上の僧侶がおり、今でもインドのデブン寺には四千人以上の僧侶がいる。亡命チベット社会およびヒマラヤのチベット文化圏における約三十万人の人口のうち、三万人以上は僧侶である。⁽⁹⁾ これがチベットの僧院と宗団の現状である。

しかし、市場主義に基づいた近代的な社会観では、現状のチベットの僧院組織、生活、学修方法は、考え直す必要があるという意見がある。現在のシステムでは、チベット仏教の僧院における収入源と言えば、法要やその他の布施と、仏具関連の品を扱う小さな商売ぐらいである。国が全面的な援助をするということは考えられないし、さりとて自立のための商売も、利益ばかりを追求することは宗教性と相容れない。近代の資本主義社会においては、現実問題として大きな僧院を維持するのは非常に難しい状況にある。

日本仏教であれチベット仏教であれ、近代化および経済発展した国においても、寺院の運営を考える上で檀家や信者との関わりというのは重要な要素である。しかし、チベット仏教の僧院ではこれまで、寺院と檀家・信者の関係について、寺院の維持、運営という観点からあらためて見つめたことがない。そして、寺院の運営経済的

な基盤も安定的とはいえないものがある。経済をその目的としないのはもちろんのことだが、仏教という、人にとっての重要な教えの基盤となる場である寺院を安定的に存続させるという意味においては、チベット仏教もまた今後、現代日本の仏教と同様に、檀家と信者の存在の重要性を考える時が来るに違いない。

また、寺院を運営している僧侶たちは、哲学や学問的な目的だけでなく、行や実践のために勉強してきた。それが活動、目的の中心であったからだ。チベット仏教では一つの学問をマスターするにも十五年ほどかかり、今もその過程は生きているが、今後の生活の中では物理的にも、ライフスタイルの変化という意味でも考えにくいものである。

チベットにおいては、すべてを僧院で学んできたが、これには、メリットとデメリットがあった。メリットとしては、仏教を宗教らしく信仰と実践のために学修してきたことが挙げられよう。長い年月、籠ってその世界に集中してきたことによって、自分の生き方、考え方、仏教の見方を、修行者はしっかりと定着させることができた。学問的にも信仰的にも、専門的で強健な人物になっていった。このような理由で、チベットでは今も、仏教は生きた宗教そのものであり、信仰を伴った学問である。それは、先述したように僧院社会で育まれたことであり、大きなメリットがあった。そこから卒業してきた人物は、仏教の思想と実践をもって檀家や信者を指導していく。そのようなやり方には大いに説得力があり、修行者も自信と満足感を持つことができたと言えるだろう。

一方、デメリットとしては、客観性に欠け、仏教独自の視点に埋没してしまう傾向になったことだ。近代的な研究と文献的な研究に関しては、不足していることは当然ある。また外からの視点を持つためには、チベット語だけでなく、英語やヨーロッパの言語でも、ある程度研究される必要もあるだろうが、環境や設備が整っていないことも事実である。

以上のような現状を踏まえ、チベットの僧院組織や僧侶の勉強について考えていく必要があるが、そのためにはまず、僧侶の役割について見つめ直すことが重要だ。仏教の勉強、自らの修行、そして社会のための説法と精神的な指導をすること、これが僧侶の役割であると思う。学び取った知識と実践した体験の知恵に基づく説法と指導が、社会のために生きるものである。だからこそ、社会が支援してくれる。勉強や修行に割ける時間が僧侶に比べて圧倒的に少ない在家の人々に対し、僧侶は長年培った知識と体験に基づく説法と指導をしていく。これが理想である。

これからの「近代化したチベット」という国づくりと、寺院の活動などを現実的なものにしていくには、多くの改革をする必要があるだろう。そのような改革の行方は、まずはチベット人自身が自分たちの伝統仏教をどのような価値観で受け止め、どのような目的で生活に取り入れるか、ということにかかっている。今まではダライ・ラマのような大きな存在のもとで問題なく過ごしてこられたが、この状態に依存するばかりでなく、宗団として長く存続することが可能な手段を築かなくてはならない。

これからのチベット国民やチベット仏教徒たちは、モンゴルなどと同じように近代化と経済を優先させる方向に歩んで行くのか。それとも、仏教的な価値観を重視した伝統を守り続けていくことに主眼を置き、異なった方針を立てるのか。これは、簡単に結論を出すことは難しい。

五、近代的な仏教学とその研究機関について

前にも触れたように、特に二十世紀中頃までは、チベットでは仏教の勉強は完全に僧侶のものであり、僧院の役割だった。仏教は信仰と実践のためであり、すぐには手の届かぬ到達点とはいえ悟りのためであり、そのため

の方法論であった。したがって、仏教の客観的な研究、文献的な研究、科学的な研究の場を作る必要性を感じなかった。しかし、近代化の波がいやがおうにも押し寄せる、チベット国の発展ということを配慮するならば、自国の伝統的文化や宗教を客観的に研究し、成果を挙げる必要もあるろう。これは自らの民族を知るだけでなく、異文化の交流、自身の国や民族を紹介する材料としても、当然なければならぬコミュニケーション・ツールである。こうした意味で、チベットでも仏教は宗教の側面だけでなく、哲学、アジアの思想、世界の宗教、国の伝統文化、といった側面からも研究する必要がある。そして、それらは必ずしも僧侶だけではなく、一般のチベットの知識人にも関わる研究分野であることは、当然のことである。国を指導するにしても、民族をリードするためにも、自分たちの文化や宗教を理解しなくては、問題が生じることは言うまでもない。時としてアジアでは、国づくりや国を指導するために、西洋化した文化と近代教育があれば十分と考えることがあるが、それは短絡的すぎると思う。グローバル化した世界では、民族のアイデンティティーがなくなる危険性もあるからである。

それと同時に、これからの仏教研究のためにも、チベット仏教の研究機関が不可欠であると考えられる。その大きな理由は、サンスクリット語とパーリ語から訳された經典は、世界に漢文とチベット語のものしか存在しないからだ。膨大な大藏經典の漢訳とチベット語訳の研究に、どんな民族でもどんな宗教でも、入ることができるのが好ましい。

こうした事情を踏まえれば、チベットにおいても他の国と同じように、仏教の研究機関について国が考えていく必要がある。そこで問題となるのは、これまでの伝統的な僧院での勉強と、これからの近代の仏教研究のバランスについてである。僧院の勉強法を学校や近代の研究所にそのまま持つていくことは不可能であり、といって僧院においても近代の研究方法も無視できない。伝統的な勉強と近代的な研究を、どのようにバランスさせるか

は重要な課題である。

過去において日本でもおそらく、この問題に直面しただろう。その結果、仏教学を大学に任せただけにより、日本仏教が抱えている問題もあるのではないだろうか。しかし、その一方で、日本の大学は世界レベルの研究成果を挙げていることは、素晴らしいことであり、有難いところである。

六、まとめとして

チベット仏教の近代化において、自分たちの伝統がどこまで生き続けるかということとは、近代化した日本仏教などを参考にして、ある程度予測することができよう。なぜなら、両者は共に大乘仏教であり、チベットも現在、市場経済化した近代社会に向かっているという二つの点からである。そして、逆に日本仏教にとっては、まだ西洋文明や近代化した考えの影響を受けていないチベット仏教の教理と実践法には、生き残らせたい部分もあるのではないかと考える。

伝統を残すという意味合いは、その伝統が我々自身と人類全体にどのぐらい価値があるかということでもある。価値があるのであれば、これからも仏教の思想と実践法が、現代の人々が求めている精神性に貢献できる姿勢を取らねばと思う。ゆえに、日本仏教にしてもチベット仏教にしても、変遷する時代と社会とともに歩むためには、ともすればひとりよがりになる危険性を孕んだ文化的な色合いや一面的な解釈のみに固執するのではなく、普遍的な認識、理解、解釈が、他の文化や時代への橋渡し役になることに気づく必要がある。古い言葉や比喩だけではなく、近代的な表現と論理をも同時に駆使することで、釈尊の説かれた仏教が、現代、あるいは未来の人たち、ひいては他の文化で育った人々にも理解できる可能性が開けると信じている。

これまで論じたように、現在、チベット仏教には、さまざまな問題が存在する。教理的な解釈、近代化における僧院組織の維持、近代ヨーロッパ社会から発せられた仏教学研究への適応などである。これらはさまざまな問題と関わっているが、チベット仏教徒や民族が、具体的にどのようにこれらの問題を意識して対策を取るかということについては、チベット人自身の社会作りと、社会の価値観が強く影響力を及ぼすことになる。その国と民族が、どこへ向かって歩いて行くこうとするのかがチベット仏教の今後を決定することになるのだ。

註

- (1) *Inner Revolution*. Robert Thurman, New York, 1998, p.214-215.
- (2) Cf. Becherth Heinz, "The Buddhist Revival in East and West"; *The World of Buddhism*, London, 1991, p.275-276.
- (3) "In the various traditions, there is shared belief that the nature of reality was long ago discovered by the Buddha" ; P.136. & "In Buddhism, the Truth is something that is found..."; p.137; *Buddhism and Science*, Donald Lopez, 2008.
- (4) ツォンカパの『菩提道次第論』による根本的な四つの論理
 ་ལཱ་འདུན་པོའི་ཐོབ་ཐོབ་ཀྱི་ལོ་རྒྱུས་ལྟར་། རྒྱལ་བོ་ལྷན་པོ་ལྟར་། རྒྱལ་བོ་ལྷན་པོ་ལྟར་། རྒྱལ་བོ་ལྷན་པོ་ལྟར་།
 ་ལཱ་འདུན་པོའི་ཐོབ་ཐོབ་ཀྱི་ལོ་རྒྱུས་ལྟར་། རྒྱལ་བོ་ལྷན་པོ་ལྟར་། རྒྱལ་བོ་ལྷན་པོ་ལྟར་། རྒྱལ་བོ་ལྷན་པོ་ལྟར་།
 ་ལཱ་འདུན་པོའི་ཐོབ་ཐོབ་ཀྱི་ལོ་རྒྱུས་ལྟར་། རྒྱལ་བོ་ལྷན་པོ་ལྟར་། རྒྱལ་བོ་ལྷན་པོ་ལྟར་། རྒྱལ་བོ་ལྷན་པོ་ལྟར་།
- (5) rNam shes min pa rnam shes kyi / Nyer len min pa'i phyir yang 'grub // PV, Ch.2: 164cd. Cf. 『タルンキールチヤの宗教哲学の原典研究』、木耳社、1981, P.136. Cf. Miyasaka Y.: *Acta Indologica*, Vol.II, p.25.
- (6) "So one fundamental attitude shared by Buddhism and Science is the commitment to keep searching for reality by empirical means and to be willing to discard accepted or long-held positions if our search finds that the truth is different."; *The Universe in a Single Atom*; The Dalai Lama; New York, 2005, p.25.
- (7) "The purpose of the Buddha coming to this world was not to measure the Circumference of the world and.....but rather to teach Dharma".....; *The Way of Freedom*, San Francisco, 1994, p.73.

- (∞) *Inner Revolution*, Robert Thurman, New York, 1998, p.232-235, p.246-257.
- (6) 『チベット文化史』(The Cultural history of Tibet) : (大) 奥山直司 春秋社 1980. p.319-320.
- 参考文献
- Dalai Lama XIV (一)
- : *The Universe in a Single Atom* : (the convergence of Science and Spirituality), Morgan Road Books, New York, 2005.
- Dalai Lama XIV (二)
- : “The Buddhist Concept of mind” : *Mind Science*, Wisdom Publication, Boston, 1991.
- David Snellgrove & Hugh Richardson
- : 『チベット文化史』 : (訳) 奥山直司 春秋社 1998.
- Edward Conze
- : *Buddhism : its Essence and Development*, Philosophical Library, New York, 1951.
- Goldstein M.C. & Tsarong P.
- : “Tibetan Buddhist Monasticism” : *The Journal of Tibet*, Vol. X, 1985, Dharamsala.
- Heinz Bechert & Richard Gombrich
- : *The World of Buddhism*, Buddhist monks & Nuns in Society and Culture, Thames and Hudson, London, 1991.
- Kimura Toshiko
- : 『キルギス人の宗教哲学の原典研究』 木耳社 1981.
- Khangkar T.K. & Fujinaka T.
- : ションカブ 『菩提道次第大論の研究』 文栄堂 2005.
- Lopez S. Donald
- : *Buddhism and Science* : The University of Chicago, Chicago, 2008.
- Miller D. Beatrice
- : “The Web of Tibetan Monasticism”, *The Journal of Asian studies*, Vol. XX, no.2, 1961, New York.
- R. K. Heinemann
- : “This World and the Other Power” : Contrasting Paths to Deliverance in Japan, *The World of Buddhism*, London, p.212-230.
- Roger R. Jackson
- : *Is Enlightenment Possible* : Dharmakīrti and rGyal tshab rje on Knowledge, Rebirth, No-self and Liberation, Snow Lion Publication, New York, 1993.
- Sithar Kunchok
- : “Tibetan monastic life in the Past and Present” : *Tibetan Review*, Vol. XXIV, 1989 (March), New Delhi.
- Thurman Robert

: *Inner Revolution* : Life, Liberty, and the Pursuit of Real Happiness. Riverhead books, New York, 1998.

Thurman Robert

: "Tibet and Monastic Army of Peace" : *Inner Peace, World Peace*. Kenneth Kraft, State University of New York Press, New York, 1992.

Miyasaka Yusho

: "Pramāṇvārttika-kārikā" (Sanskrit & Tibetan) : *Acta Indologica* Vol.II, Naritasa Shinshoji, Narita, 1971/72.

〈キーワート〉 近代とチベット仏教 チベット仏教の問題

チベット仏教の近代化